

第499号  
令和4年

10月11日

# すまいるたうん



発行元  
東京新聞  
南千住専売店  
TEL3803-1781  
発行責任者  
鬼塚 佳代子  
TEL090-2657-0300

## 一期一会 忘れ得ぬ時間②

「すまいるたうん」のアルバムから掲載

です。

◆介護の伝道師 荒川不二夫さん

荒川区男性介護者の会(オヤジの会)の代表

(平成27年6月 第323号)

「好きで病気になつたわけではなのだから」

表 荒川不二夫さん(89歳)は2009年設立した全国組織「男性介護者と支援者の全

国ネットワーク」(京都)の代表であります。

「予備知識もなく突然始まつた介護、どうすればいいのだろう」

昭和61年、病気で半年入院して戻つて来た

奥様が自宅の階段から転落し、脳内出血を

起つたことから始まりました。荒川さん59

歳、奥様51歳の時でした。病院に再入院しま

したが、騒ぐから廊下にベッドを出されて

しまいました。その様子を見て自分で奥さん

を介護しようと決意しました。30年近く前

のことですから、介護保険制度もなくどこに

相談したら良いのかも判らない状態でした。

工務店をしながら、慣れない家事全てと介

護に、とまどいと思考錯誤の日々でした。

「縁があつた人。いとしさと愛を忘れないで」

日中、一人になる奥さんに仕事中に毎日何度も変わりないかと電話をしていました。

いつも美味しいと言つてくれました

梅干を作つたり、糠みそもつけたりと介護

に迫られる中、奥様に愛情を注いだ食事を

作つていました。手足が徐々に自由が効かな

くなつていく奥さんのために、本職を生かし

てワイヤーで移動する昇降機を開発して設

置し、手すり、室内歩行器・シャワー・チエア・

食堂のイスをくりぬき、ポータブルトイレ等を

奥様のために作りました。

「お父さん、ありがとうございます」

8年の在宅介護の後に亡くなつた奥様の最

後のことをばです。

「ふさぎ込んだらダメ。自分が持たない。」

その後、長男の方を突然難病で亡くされ、

その2年後には次男さんが運動機能障害の

ある難病になり、認知症も発症しました。

「階段に物を置くのも意味があるんです」

次男の方が階段から落ちても、置いてある

荷物がクッションになり怪我を防ぐからとのこ

と。なかなか、そこは在宅で介護されている

当事者でないと判らないことです。

「お手上げになる前に」

次男の方も3年間在家で介護されていま

した。53歳の要介護4の男性を89歳の荒川

さんが介護することにも限界があります。

苦渋の選択でしたが、今は次男の方は施設に

入所し毎日面会に行かれています。

「叱らないこと。本人は好きで病気になつたわ

けじやない。それを理解して、朗らかにいつも

笑顔で

息子さんが食べることができるようになった、歩けるようになったことが、荒川さんの喜びになっています。

「相手の立場に立つていたわりと愛情を持つて」

言葉に気を使って」

面会に行き、相手の感情を損なわないよう

にゆっくりゆっくりと理解しやすいように話

すことを心がけて漫才のような会話を楽し

んでいます。

次男の方の介護が始まつてから、もう一

人の肉親のお孫さんも24歳の若さで亡くな

り、次男の方だけがたつた一人の肉親です。

「なぜ自分だけがと思ったことがありますか」

「運命だから」と笑顔で話す荒川さんは、九

州以外は全国各地に講演で呼ばれていました。

平成21年にも取材させて頂いたことがあります。気負いなく淡淡と寄り添える。荒

川さんとの出会いえた時の風景は、私の記憶に鮮明に記録されています。過酷な運

命を明るく笑つて昇華する荒川さん、私の尊

敬する方です。笑うことで相手を癒し、ま

た自分を保たれていたのかとも感じました。

荒川さんの優しさを

介護に苦悩されている方へ頂きたく、

再掲載しました。

